【論文】

タタール・ディアスポラ[1]の言語使用状況
― タシケントのタタール人[2]の事例から ―

中村瑞希

[Summary]

Tatar Diaspora: Language situation and attitudes toward daily languages
– the case of Tatars in Tashkent, Uzbekistan –

NAKAMURA Mizuki

The purpose of this paper is to question the actual language situation of Tatars living in Uzbekistan that is currently aiming to establish the dominance of Uzbek language in purpose of national integration. Russian language had a dominant status as the language of inter-ethnic communication in Uzbekistan, at the same time it is considered to be the first language of the majority of non-Uzbek population.

This paper focuses on the current language situation of Tatars in Uzbekistan, in particular on the attitudes toward their daily languages. Ample studies have demonstrated that the majority of minorities in Uzbekistan including Tatars are "russified" during the Soviet era; in contrast, Russian language is gradually losing its dominance after the collapse of the Soviet Union. However, few studies have focused on the actual language situation of minorities in this area. Based on analysis on the result of individual interviews and survey questionnaires conducted by the author from April 2013 to February 2014, this paper reports that Russian language is still widely spoken by Tatars in Tashkent; on the other hand, Uzbek language is being widespread especially to the young generation received education after the independence of Uzbekistan.

キーワード：ウズベキスタンのタタール人、タタール・ディアスポラ、言語使用状況、言語政策、ナショナル・アイデンティティ

1. 序論

1.1 はじめに

かつてシルクロードの要衝として栄えたウズベキスタンには、その名残として現在も多数の民族がモザイク状に居住しており、その数は 120 以上とも言われている。異なる言語・文化・宗教・民族的出自を持つウズベキスタンの諸民族を結びつけるものは、ごく最近まで "ソヴィエト国民 (Советский народ)" という共通のナショナル・アイデンティティ[3]と、ロシア語という共通言語であった。ソ連からの独立とともに、ソヴィエト国民という共通の帰属意

識が崩壊したウズベキスタンでは、新たに国民統合の必要性に迫られることとなった。そこで近年では、新たに“ウズベキスタン国民 (O'zbekistonlik)”というナショナル・アイデンティティの形成とともに、ウズベク語教育が急速に推進されている。独立後の非基幹民族[4]を中心とした国民の国外流出[5]や、ウズベク人の出生率の向上といった複数の要因も重なり、社会のウズベク語化は急速に進むこととなった。こうしたウズベク語化の影響は、ソ連期からロシア語中心の生活を送ってきたウズベキスタンのタタール人の間でも広がりつつある。

ソ連期から今日に至るまでタタール民族学校[6]を持たなかったウズベキスタンのタタール人は、ロシア語学校に通わざるを得ず、長らく他の民族との交流においてはロシア語に依存してきた。ゆえにウズベキスタン国内で最もロシア語化が進んだ民族のひとつとして捉えられているが、一部の家庭では民族語であるタタール語は家族や親戚との会話を通して脈々と継承されてきた。ソヴィエト国民という強力なナショナル・アイデンティティの影響下において、自身がタタール人であることを思い出させるものの一つがタタール語であったと考えることができる。

ところが、近年になって同じテュルク諸語のひとつであるウズベク語がタタール語を侵食するようになったことで状況は一変した。タタール語がウズベク語の影響を強く受け、取り込まれようとしている状況に、民族的な同化という結末を考えるタタール人は少なくない。このような背景からタタール語やタタール文化の学習に注目が集まっている。2009 年以降はタタールスタン共和国の出資によりタタール語講座がタシケント市で開講し、タタール語を学ぶタタール人は若い世代を中心に着実に増えつつある。

1.2　研究の目的と意義

タタール人は旧ソ連諸国のみならず、フィンランドやトルコ、米国といった様々な国や地域に分散するように居住している。彼らは各地にコミュニティを形成するのみならず、基本的には独自の日曜学校やタタール語講座を持ち、タタール語やタタール文化の保持に努めるといった独自性を持つ。近年はグローバル化によって、何らかの理由で生まれ育った故郷を離れてトランスナショナルに生きる人が増加し、同時に自民族語の教育や継承といった問題も叫ばれるようになって久しい。数世紀をかけてコミュニティを形成し、民族語や民族文化を保持し続けてきた各地のタタール・ディアスポラの事例は、今後ますます増加すると考えられる移民や難民の言語・文化の教育という課題に対しても示唆に富んだものとなると筆者は考える。

また、本稿で取り上げるウズベキスタンが国家語として定めるのはウズベク語である。ウズベク語はタタール語と同じテュルク諸語に属しており、お互いに言語的な距離が近いという特徴を持つ。さらに、旧ソ連諸国で話される他の言語と同様に、ウズベク語とタタール語にはかつての支配言語であったロシア語から多数の語彙が流入した経緯を共有している点も特徴的である。ゆえに、別の言語でありながらもいくつかの点でウズベク語とタタール語は密接な関係にあるという独自性を持っており、興味深い事例研究になると考えられる。

なお、ウズベキスタンに居住する多数の民族のなかでも、とりわけロシア人やタジク人の言語使用状況に関しては活発な研究が行われてきた。一方で、ロシア語化が進んだ民族のひとつとして考えられているタタール人は、ロシア人と同じ文脈で捉えられがちで注目を浴び

る機会は決して多くはなかった。本研究はそうした現状の打開を目的に、タシケントに居住する様々な社会身分・性別・世代のタタール人への聞き取り調査を通して、変わりゆく彼らの言語使用状況を概観する。さらに、言語使用調査を通して、ウズベク語化が進む社会のなかでタタール人がどのように言語を選択し、そしてそれぞれの言語がどのような役割を果たしているのかを明らかにしていきたい。

1.3　先行研究の検討

中央アジア諸国の言語や社会を扱った研究は数多く存在するが、その大半において言語が国民統合やナショナル・アイデンティティ形成の中核をなすという認識がなされてきた。とりわけ中央アジアにおける言語政策は、国民統合や国家建設に深く関わるという認識により、日本においても様々な研究蓄積が存在する (W.Fierman 1991、塩川 1999、淺村 2007、臼山 2014)。

また、中央アジア諸国を含む旧ソ連諸国の多くでは、法の側面からロシア語の地位が低下しつつある一方で、基幹民族語 (国家語) の地位と影響力は年々強まりつつあるという指摘もなされている (臼山 2005、M.Fumagalli 2007、A.Pavlenko 2008、小田桐 2015 など)。しかし、中央アジア諸国の言語状況に関する研究は伝統的に基幹民族語とロシア語の関係に主軸が置かれがちで、非基幹民族語への視点が欠落しがちである。また、これまでになされてきた議論の多くはロシア語や英語による報道・統計資料を用いてなされてきたという事実にも注目するべきであろう。つまり、民族語資料を用いた議論は未だ少なく、民族語資料の使用、聞き取り調査などによる個別事例[7]が求められている。

在外タタール人研究は近年注目を集めはじめ、米国や中国・新疆ウイグル自治区、バルト三国、カザフスタンといった様々な地域に居住する比較的大きなタタール・ディアスポラにおけるタタール文化の復活とその位置付け、宗教の保持状況といった幅広い研究成果が生まれている (Y.Davenel 2009、E.Gazizova & M.Fayzulaeva 2010、Л.Садыкова 2010、A.Юсупова 2011、M.Klaas 2015 など)。一方で、在外タタール人の言語使用状況や言語意識に焦点があたり始めたのはここ数年のことであり、研究の蓄積が十分にあるとは言い難い状況である。G.Nabiullina & A.Yusupova(2015)、M.Nakamura(2016) などが挙げられる。

なお、ソ連期から現在にかけて、タタールスタン共和国やその周辺地域 (主に沿ヴォルガ地域) に居住するタタール人の言語使用状況に関しては、非ロシア人のロシア語普及率を把握したい政府の思惑もあり、詳細な調査や分析、比較といった研究蓄積が豊富に存在する (Л.Байрамова 2001、M.Губогло и С.Смирнова 2002、Н.Шарыпова 2004 など)。

以上に挙げた先行研究に鑑みても、中央アジアの非基幹民族 (マイノリティ) の言語意識や言語使用状況の諸相を個別的に捉えていくことは、この地域の言語状況を論じる上でも新たなテーマとなり得ると考えられる。

1.4 「タタール人」とは誰か

今日、中央アジアに居住するタタール人は主にふたつのグループに分けることができる。

(1) 14 世紀から 19 世紀にかけて現在のカザンやウファ、オレンブルクから中央アジア地域に商人として流入、定住したタタール人の子孫。

(2) スターリン没後の1950年代後半に移動の自由が認められ、新たな農地や暖かな気候を求めて移住してきたタタール人の子孫。

本稿においては、主に上記(1)と(2)の子孫で、民族籍[8]がタタール人である個人、あるいは民族籍がタタール人でなくともタタール人としての認識を持つ個人をタタール人とし、調査対象とする。後者に関しては、タタール・コミュニティにおいてその個人がタタール人として認知されており、民族籍がタタール人である者を三親等以内に持つ個人に限る。

2. ウズベキスタンの言語政策と言語状況の概観

2.1 言語法による諸言語の地位の移り変わり

1930年：言語法[9]：ロシア語・ウズベク語ともに国家語とされた。
1989年：言語法[10]：国家語はウズベク語、ロシア語は民族間交流ツールとして使用が保障された。
1992年：共和国憲法[11]：国家語はウズベク語、ロシア語に関する記述が削除された。
1995年：改定言語法[12]：国家語はウズベク語、同じくロシア語に関する記述はなし。

言語政策は今後の社会構造を模索し、形成していく上でも重要な課題の一つである。現行の言語に関する法律や政策はウズベク語を中心としたものに移行しており、ウズベキスタンは基幹民族であるウズベク人を中心に形成される国家建設の途上にある可能性を指摘することができる。

ソ連崩壊後、様々な民族が居住するウズベキスタンでは速やかな国民統合を目指し、主に教育と言語の側面からあらゆる改革が行われてきた。とりわけ、ソ連期に共有された“ソヴィエト国民”に代わり、新たに“ウズベキスタン国民”というナショナル・アイデンティティの形成が急速に推進されている。こうした経緯もあり、もともとウズベク人の割合が多かったことからウズベキスタンでは急速にウズベク語化が進むと同時に、ロシア語の社会的地位は大きく低下しつつある (Fumagalli 2007: 18-19)。

2.2 教育法によるウズベク語の地位向上

1992年：教育法 (Ta'lim to'g'risidagi qonun)
1997年：改訂教育法及び人材育成国家プログラム (Kadrlar tayyorlash milliy dasturi)
→ 義務教育段階における全国共通のウズベク語及びウズベク文化といった科目の必修化。

ウズベキスタン国内の義務教育学校では、全国共通のウズベク語やウズベク文化といった科目を含んだ教育過程を通して「ウズベキスタン国民」というナショナル・アイデンティティの形成が急速に推進されている (トフタミルザエヴァ＆蒲生 2014: 154)。

なお、教育法の整備とその実施により義務教育のウズベク語化は進んだものの、大学以上の高等教育の場ではロシア語能力がないことで研究活動に支障をきたす例[13]が報告されている。入試では民族を問わずウズベク語の学科試験の受験が必須となっており、近年はロシア語コース[14]の募集が減少する一方で、ウズベク語コースの募集が増加している。しかし、

ウズベク語で書かれた専門的な内容の教科書はなく、ウズベク語コースに所属する学生であってもロシア語の教科書を読まざるを得ない状況となっている。

2.3　民族間共通語としてのロシア語

ソ連期初期は民族語教育が推奨されていたが、1958 年から 1959 年にかけて教育改革が行われ、子どもを民族語学校かロシア語学校のどちらに通わせるかは保護者の自由選択となった。通用範囲の広いロシア語と狭い民族語のどちらで子どもに教育を受けさせられるかが自由選択となると、必然的にロシア語学校を選択する保護者が多く、以降長期にわたってロシア語教育の拡大と民族語教育の縮小という状況が続くこととなった (塩川 1999: 162-173)。教育の側面からロシア語が推進されることによって社会のロシア語化が進み、必然的にタタール人の多くも受容していったと考えることができる。

近年、ウズベキスタンの全人口の 80% 以上を基幹民族であるウズベク人が占めている [15] とされ、ウズベク語のみを解する若い世代も増加傾向にあるものの、非基幹民族を中心に話されるロシア語は依然として異民族間共通語として広く使用されている。ソ連期に強力なロシア語教育が行われたことにより、ウズベク人を含めたウズベキスタンの諸民族がロシア語を第一言語とするようになった (Арутюнян 2003)。

3.　タシケントのタタール人の言語使用状況

3.1　調査の方法

タシケントに居住するタタール人が日常の様々な場面でどのように言語を選択し、そしてそれぞれの言語がどのような役割を果たしているのかを明らかにする目的で、聞き取り調査と参与観察を行った。聞き取り調査は事前に用意した質問項目に基づいたもので、同時に 1 名あたり 1 日から 2 日間をかけて日常生活への参与観察を組み合わせた形式である。聞き取り調査への回答は全て自己申告に基づくもので、“最も流暢に話すことができる (と自身が考える) 言語 ” といった意識を大きく反映したものである。ゆえに、聞き取り調査の回答は実際の言語使用状況の一側面に過ぎないと考え、参与観察も伴せて行うことにした。なお、本稿では質問項目に基づく聞き取り調査の回答の一部と、参与観察の際に聞かれた意見の一部を取り上げ、分析していく。

期間：	筆者がタシケント市に留学 [16] していた 2013 年 3 月から 2014 年 2 月の間の 11 ヶ月間。 2013 年 03 月～ 04 月 : タタール文化センターへの聞き取り調査、インフォーマントを紹介してもらう 2013 年 04 月～ 09 月 : ユヌサバッド地区 *(Yunusobod tumani)* における聞き取り 2013 年 09 月～翌 1 月 : ミルゾ・ウルグベック地区 *(Mirzo-Ulug'bek tumani)* における聞き取り 2014 年 01 月～ 02 月 : 不足データの収集などの補完調査
内訳：	ミルゾ・ウルグベック地区では 45 名、ユヌサバッド地区では 43 名、合計 88 名のインフォーマント。
方法：	インフォーマントには、また次のインフォーマントを紹介してもらうという方法で繋がる。ひとりあたり 1 日から 2 日間ほどかけて、日常生活への参与観察と聞き取り調査を行う。

なお、タタール文化センターと関係を持つインフォーマントはとりわけタタール語・タタール文化の保持率や愛着、学習意欲が高いことが考えられたため、紹介してもらったインフォーマントはユヌサバッド地区の1名のみにとどめた。前述の言語法や教育法の影響で、タシケントのタタール人の言語使用状況は年代によっても大きく異なるはずである。同センターに紹介してもらったインフォーマントを皮切りに、インフォーマントには自身とは年代の異なる次のインフォーマントを紹介してもらう方式で繋がっていった。

なお、調査に用いた言語はインフォーマントによって異なる。簡単な会話はタタール語、具体的な説明はロシア語といった頻繁なコードスイッチを行った人もいれば、全体を通してロシア語かウズベク語など、バリエーションは様々である。調査票も三言語で用意し、インフォーマントにとって最も“気楽に”使用できる言語で回答してもらった。

3.2　調査内容と質問項目 [17]

聞き取り調査の質問項目は以下のとおりである。

(1) 基本情報 (氏名、性別、生年月日、職業、自身と両親の民族籍、出身地と居住地)

(2) 言語情報 (義務教育期間の教授言語、家庭内言語、母語は何語か、他)

(3) 言語使用に関して (具体的にどのような場面でどの言語を使用するかについて)

(4) 言語への意識 (ウズベク語・ロシア語・タタール語などの言語に対する意見)

(5) その他 (国内の言語をめぐる政策や状況に対する意見など)

ウズベキスタンでは民族籍は選択制のため、自身の民族籍がタタール人ではない場合はタタール人としての認識を持ち、さらに三親等以内にタタール人の親族を持つ者を調査対象とした。多くの場合は両親のどちらかがタタール人として民族籍を登録しているため、自身と両親の民族籍を調査項目に含めている。

言語使用状況を明らかにする上で重要なのは (2) と (3) の質問項目である。タタール人の言語使用状況の包括的な理解を試みるべく、本稿で取り上げた回答もこれらの質問項目の一部から選択している。前述の通り、聞き取り調査への回答は全て自己申告に基づくものであり、インフォーマントの意識が如実に反映されることから、同時に行った参与観察で聞かれた関連意見と合わせて分析を試みる。なお、教授言語が第一言語となることが多いため、義務教育期間の教授言語も調査項目に含めている。

3.3　調査結果

[表 1] あなたの家庭内で使用する言語を教えてください (複数回答可)

年代	ロシア語	ウズベク語	タタール語	その他
10 代 (14 名)	13 (92.9%)	0 (0.0%)	8 (57.1%)	0 (0.0%)
20 代 (16 名)	14 (87.5%)	0 (0.0%)	5 (31.3%)	0 (0.0%)
30 代 (16 名)	15 (93.8%)	1 (6.3%)	6 (37.5%)	0 (0.0%)
40 代 (12 名)	12 (100.0%)	0 (0.0%)	2 (16.7%)	0 (0.0%)
50 代 (10 名)	10 (100.0%)	0 (0.0%)	4 (40.0%)	0 (0.0%)
60 代 (10 名)	10 (100.0%)	0 (0.0%)	3 (30.0%)	0 (0.0%)
70 代 (10 名)	10 (100.0%)	0 (0.0%)	5 (50.0%)	0 (0.0%)
合計と平均 (合計 88 名)	85 (96.6%)	1 (1.1%)	33 (37.5%)	0 (0.0%)

以上の表より、ロシア語を日常的に使用するタタール人が多数派 (96.6%) ではあるが、家庭内でタタール語を使用するタタール人も存在することが明らかになった (37.5%)。しかし、「話すのは基本的にロシア語で、祖父母などと話すときのみ断片的にタタール語で話す」(30 代女性)、「ロシア語で話す割合が大きく、タタール語は自発的に学ばないと知らない単語も多い」(20 代女性) といった意見が若い世代を中心に聞かれる。一方で「昔はよくタタール語で話したものだが、子どもや孫とはロシア語で話すのがほとんど」(60 代男性)、「タタール語で話すことに不自由はないが、話す機会がない」(70 代女性) といった意見が高齢者世代から聞かれたことからも考えられるとおり、タタール語を使う機会は個人差が大きいと思われる。

また、次の [表 2] を見てみると、若い世代を中心にウズベク語で義務教育を受けたものが増加傾向にあるにもかかわらず、家庭内でウズベク語を話すのは 1.1% と少数派である。ウズベク語で教育を受けたインフォーマントから「ウズベク語は異民族のことばという意識があり、しっくりこない」(20 代女性)、「ウズベク語はウズベク人のことばなのであまり話したくない」(10 代男性) といった意見も聞かれた。タタール人のあいだで、ウズベク語は異民族の言語という認識が広く共有されており、公の場で使用はしても、家庭内では使わない言語である可能性が考えられる。

[表 2] あなたの義務教育時代の教育言語を教えてください (1 言語のみ選択可)

年代	ロシア語	ウズベク語	その他 (民族語)
10 代 (14 名)	8 (57.1%)	6 (42.9%)	0 (0.0%)
20 代 (16 名)	12 (75.0%)	4 (25.0%)	0 (0.0%)
30 代 (16 名)	15 (93.7%)	1 (6.3%)	0 (0.0%)
40 代 (12 名)	12 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
50 代 (10 名)	10 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
60 代 (10 名)	10 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
70 代 (10 名)	10 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計と平均 (合計 88 名)	77 (87.5%)	11 (12.5%)	0 (0.0%)

ロシア語で義務教育を受けた者の割合は 87.5% と大多数を占める。とりわけ 40 代以上のインフォーマントの全員がロシア語で義務教育を受けたと回答しており、この結果からもソ連期のロシア語教育の普及率の高さを垣間見ることができる。「ロシア語の正確な知識がステイタスで、将来的に海外留学や、国外で働く機会が子供に巡ってきたときにはロシア語の知識は英語を学ぶ上でも、さまざまな学問を修めるうえでも有利になる」(40 代女性) と、10 代の子供をロシア語学校に通わせるインフォーマントは述べる。こうした発言はロシア語学校に子供を通わせるインフォーマントのみならず、ロシア語学校に通う 10 代のインフォーマントからも聞くことができた。

10 代・20 代のあいだでも依然としてロシア語で義務教育を受ける割合は高いものの、ウズベク語学校に通うタタール人の生徒も増えつつある。子供の教育言語を選択するのは主に両親だが、自身の子供をウズベク語学校に通わせているインフォーマントは次のように述べた。「数年前からウズベク語ができないことで不便を感じることが増えた。子供には不便な

思いをしてほしくない」(40代男性)、「娘が成人する頃には、この国ではロシア語よりもウズベク語が優先的な言語となるだろう。ウズベク語ができないことで今後の生活に支障がでる可能性もあるのでウズベク語学校へ進学させることにした」(30代女性)。こうした意見からは、ウズベク語化が着実に進むウズベキスタンでの将来の生活を見据え、タタール人が自身の子供をウズベク語学校へと進学させている現状をみることができる。

教育言語の変化はソ連崩壊とともに発生したものと考えられる。1991年に義務教育年齢に達したのは1984年生まれの子供たちである。調査を行った2013年時点で1984年生まれのインフォーマントは29歳であり、10代・20代のインフォーマントは全員がウズベキスタンの独立後に義務教育を受けたことになる。

[表3] もっとも流暢に話すことのできる言語をひとつ選んでください

年代	ロシア語	ウズベク語	タタール語	その他
10代(14名)	8 (57.1%)	6 (42.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
20代(16名)	12 (75.0%)	4 (25.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
30代(16名)	15 (93.7%)	1 (6.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
40代(12名)	12 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
50代(10名)	10 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
60代(10名)	10 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
70代(10名)	10 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計と平均(合計88名)	77 (87.5%)	11 (12.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

[表2] と比較してみると、義務教育を受けた言語(＝教授言語)がもっとも流暢に話すことのできる言語(＝第一言語)と完全に合致している。第一言語と教授言語が合致する現象は珍しいことではないが、[表1] でも紹介した「ウズベク語はウズベク人(＝異民族)の言語なので、積極的に話したくはない」という意見とは裏腹に、ある意味ではロシア語とウズベク語といった「異民族の言語」を第一言語とするタタール人の言語状況を垣間見ることができる。また、タタール語を第一言語とするインフォーマントはおらず、タタール人の大多数が第一言語をロシア語としていることが明らかになった。しかし、10代・20代といったソ連崩壊後に生まれ、教育を受けた世代を中心に、ウズベク語で義務教育を受けた割合が増えると同時に、ウズベク語を第一言語とするタタール人も増加傾向にある。

[表4] テレビやラジオを視聴するとき(複数回答可)

年代	ロシア語	ウズベク語	タタール語	その他
10代(14名)	13 (92.9%)	10 (71.4%)	8 (57.1%)	3 (21.4%)
20代(16名)	16 (0.0%)	8 (50.0%)	5 (31.3%)	1 (6.3%)
30代(16名)	15 (93.8%)	6 (37.5%)	6 (37.5%)	2 (12.5%)
40代(12名)	11 (91.7%)	5 (41.7%)	2 (16.7%)	1 (8.3%)
50代(10名)	10 (100.0%)	4 (40.0%)	3 (30.0%)	0 (0.0%)
60代(10名)	10 (100.0%)	2 (20.0%)	3 (30.0%)	0 (0.0%)
70代(10名)	10 (100.0%)	4 (40.0%)	5 (50.0%)	0 (0.0%)
合計と平均(合計88名)	85 (96.6%)	39 (44.3%)	32 (36.4%)	7 (8.0%)

「新聞や雑誌を読む」、「テレビやラジオの視聴」といった私的な場面では、タタール語が一定の割合で使用されている。[表 6] のような公の場面での使用は皆無であることから、明確な使い分けが見られる。

回答をみるとロシア語が選択された比率が非常に高いが、これは現在のウズベキスタンのメディア状況が反映されている。タシケントではラジオ番組は主にロシア語かウズベク語の 2 言語で放送が行われている。また、テレビに関しても同様に 2 言語放送が行われているほか、ロシア連邦のテレビ番組の視聴が可能な家庭が大多数である。家庭内で視聴するとすれば家族全員が理解するロシア語を選択する傾向にある可能性が考えられる。インフォーマントからは「私と両親はウズベク語を聞いたら分かるが、一緒に暮らす祖父母はロシア語だけを理解するので、家族全員が理解するロシア語で番組を視聴する」(10 代女性)「国の情報を得るために国営放送を視聴するが、ウズベク語の放送時間が長いのでウズベク語で視聴することのほうが多い。だが、国営放送は退屈なので、家族全員が完全に理解するロシア語で娯楽番組を視聴し、家族で楽しむ」(30 代男性) といった意見が広く聞かれた。

タタール語に関しては、タタールスタン国営放送 [18](THB: Татарстан - Новый Век) の衛星放送がウズベキスタン全土でも視聴可能である。タタール語でテレビを視聴すると回答したインフォーマントの全員がこの THB を時々視聴しているという。「タタール語の読み書きはほとんどできないが、聞いて理解することはできる。タタール語を聞いて分かったとき、自分がタタール人であることを再認識することができる」(50 代女性)、「タタール語を聞くと懐かしい気持ちになる。社会生活ではウズベク語とロシア語しか聞く機会がないが、せめてタタール人であることを忘れないためにもタタール語を聞く時間は意図的に持つようにしている」(30 代男性) といった意見にもあるとおり、愛着や懐かしさからタタール語で番組を視聴するインフォーマントは少なくない。10 代にタタール語でテレビを視聴すると答えた割合が高いのは、祖父母世代との在宅時間が長いことと、言語的に近いウズベク語が流暢であるがゆえにタタール語も付随的に理解しているからだと思われる

[表 5] 新聞や雑誌 (紙媒体・インターネットどちらでも) を読むとき (複数回答可)

年代	ロシア語	ウズベク語	タタール語	その他
10 代 (14 名)	11 (73.3%)	6 (42.9%)	3 (21.4%)	4 (28.6%)
20 代 (16 名)	12 (75.0%)	5 (31.3%)	5 (31.3%)	1 (6.3%)
30 代 (16 名)	15 (93.8%)	5 (31.3%)	3 (18.8%)	0 (0.0%)
40 代 (12 名)	12 (100.0%)	3 (25.0%)	2 (16.7%)	1 (8.3%)
50 代 (10 名)	10 (100.0%)	2 (20.0%)	2 (20.0%)	0 (0.0%)
60 代 (10 名)	10 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
70 代 (10 名)	10 (100.0%)	1 (10.0%)	1 (10.0%)	0 (0.0%)
合計と平均 (合計 88 名)	80 (90.9%)	22 (25.0%)	16 (18.2%)	6 (6.8%)

いずれの言語も新聞や雑誌ではテレビ・ラジオの結果と比較すると使用率が下がるが、これはメディアの性質の相違によるものと考えられる。つまり、新聞や雑誌を読むためには、まずこれらを入手し、読むという能動的な姿勢がテレビやラジオ以上に求められるはずである。そのため、耳で理解はできても読む能力がやや劣る言語では、新聞や雑誌を読むことを

敬遠し、主には第一言語などの得意とする言語で読んでいるものと思われる。

なお、新聞や雑誌を読む際にロシア語のほかにも、ウズベク語とタタール語も同時に使用しているインフォーマントも一定数存在することが調査結果から分かった。なお、ロシア語は年代を問わずに広く使用される一方で、ウズベク語の使用率は10代・20代が突出して高い。ウズベク語で得る情報は政府機関等が発信したものが中心で、ロシア語は隣国カザフスタン共和国やロシア連邦のニュースサイト等で情報を得る際に利用しているものとみられる。ウズベク語とロシア語の両言語で情報を得ると回答したインフォーマントからは「ウズベキスタンのニュースは本当のことを言わない。ロシアのメディアにも諸問題はあるが、ウズベキスタンのニュースよりは真実を伝えている」(30代男性)、「ウズベキスタン国内では反政府的なニュースサイトは検閲によって見ることはできないが、カザフスタンやロシアのニュースサイトは閲覧が可能で、ウズベキスタンのニュースを別の視点から伝えてくれることも多い」(50代女性)といった、ウズベキスタンのニュースサイトに対する不信の声が聞かれた。一定数のタタール人はウズベク語とロシア語の2言語で得る情報をうまく使い分けながら、多方面から情報を得ているようである。

タタール語を含め、その他の言語(英語、トルコ語、中国語など)から情報を得ると回答したインフォーマントも同様に、ウズベク語で発信されているウズベキスタンのニュースに対する不信感からウズベキスタン国外からの視点を求めている。タタール語に関しては「国外のニュースサイトが使用する言語の中で、たまたま理解可能な言語の一つがタタール語であった」(20代男性)といった意見も聞かれた。

[表6] 公的機関(郵便局・役所・省庁・警察署・教育機関など)を訪れたとき(複数回答可)

年代	ロシア語	ウズベク語	タタール語	その他
10代(14名)	8 (57.1%)	11 (78.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
20代(16名)	12 (75.5%)	9 (56.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
30代(16名)	14 (87.5%)	8 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
40代(12名)	12 (100.0%)	5 (41.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
50代(10名)	10 (100.0%)	4 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
60代(10名)	10 (100.0%)	4 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
70代(10名)	10 (100.0%)	5 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計と平均(合計88名)	76 (86.4%)	46 (52.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

公の場でのロシア語の使用率は全体的には高いものの、10代・20代のロシア語使用率は平均よりも低く、一方でウズベク語の使用率が高い。特筆すべきは、どの世代もウズベク語を使用していることである。「役所では昔はロシア語で話してもロシア語で対応してくれたが、ここ数年はロシア語で話してもウズベク語で対応され、困って周囲の職員や市民にロシア語で助けを求めても通じないこともある。必然的に拙いながらウズベク語を話さなければ、役所での手続きは困難な場合がある」(60代女性)、「郵便局では人によって全くロシア語ができない局員もいる。その場合はウズベク語で話さざるを得ない」(30代女性)といったインフォーマントの発言のとおり、近年公的機関では職員とロシア語での意思疎通が徐々に困難になりつつある現状にある。こうした状況の変化は、公的機関におけるタタール人のウズ

ベク語使用の理由の一つとして挙げることができるだろう。

ウズベキスタンは国家の方針としてウズベク語の使用を推進しているが、こうした動きを最初に受けたのは国家機関を含めた公的機関である。近年、これらの機関への就職のためにはウズベク語能力が求められることが多く、結果としてウズベク語に堪能な職員が増加したことにより、ウズベク語が優先的に使用されるようになったと考えられる。

[表 7] タタール語を話したい・学びたいという意志はどれほどですか (一つのみ選択可)

年代	非常に強い	強い	あまり強くない	弱い
10 代 (14 名)	5 (35.7%)	5 (35.7%)	2 (14.3%)	2 (14.3%)
20 代 (16 名)	6 (37.5%)	4 (25.0%)	4 (25.0%)	2 (12.5%)
30 代 (16 名)	6 (37.5%)	6 (37.5%)	0 (0.0%)	4 (25.0%)
40 代 (12 名)	3 (25.0%)	6 (50.0%)	1 (8.3%)	2 (16.7%)
50 代 (10 名)	2 (20.0%)	2 (20.0%)	2 (20.0%)	4 (40.0%)
60 代 (10 名)	3 (30.0%)	1 (10.0%)	2 (20.0%)	4 (40.0%)
70 代 (10 名)	2 (20.0%)	5 (50.0%)	0 (0.0%)	2 (20.0%)
合計と平均 (合計 88 名)	27 (30.7%)	29 (33.0%)	11 (12.5%)	20 (22.7%)

とりわけ 10 代から 40 代にかけてタタール語を話したい・学びたいという意志をもつ人が過半数を占めている。タタール語を話したい・学びたい理由の多くは「ロシア語とウズベク語を話していると民族的に自分が誰だかわからなくなる」(20 代女性)、「タタール人であることを意識するためには、タタール語を学ぶのが最も簡単なことだと思うから」(30 代女性) といった意見であった。こうした意見からは、近年のウズベク語・ウズベク文化主義的な動きの中で、タタール人としてのアイデンティティを宣言したいという意識を読み取ることができる。

一方で、タタール語を話したい・学びたいという意志を持つ人の割合が低かった 50 代・60 代からは「この年齢になって新しくタタール語を学ぶ時間も気力もない」(50 代男性)、「ロシア語だけで生活をしてきて、今更言語を変えてまでこの国で暮らそうとは思わない。ロシア語での生活が難しくなったら、ロシアに移住するだろう」(50 代女性) といった回答があった。ソ連期のロシア語での教育・生活が当然であった時代に生まれ育ち、教育を受け、就業した世代からはロシア語に対する根強い信頼を感じることができる。

[表 8] 近年のウズベク語重視の動きに関してどのような印象を持ちますか (一つのみ選択可)

年代	とてもよい	まあよい	あまりよくない	わるい
10 代 (14 名)	0 (0.0%)	3 (21.4%)	7 (50.0%)	4 (28.6%)
20 代 (16 名)	0 (0.0%)	1 (6.3%)	10 (62.5%)	5 (31.2%)
30 代 (16 名)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	10 (62.5%)	6 (37.5%)
40 代 (12 名)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (33.3%)	8 (66.7%)
50 代 (10 名)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (40.0%)	6 (60.0%)
60 代 (10 名)	0 (0.0%)	1 (10.0%)	3 (30.0%)	6 (60.0%)
70 代 (10 名)	0 (0.0%)	1 (10.0%)	6 (60.0%)	3 (30.0%)
合計と平均 (合計 88 名)	0 (0.0%)	6 (6.8%)	44 (50.0%)	38 (43.2%)

[表9] 今後、どの言語がウズベキスタンで暮らす上で必須となると思いますか (2言語まで選択可)

年代	ロシア語	ウズベク語	タタール語	英語	その他
10代(14名)	3 (21.4%)	14 (100.0%)	3 (18.8%)	8 (57.1%)	0 (0.0%)
20代(16名)	5 (31.3%)	16 (100.0%)	5 (31.3%)	6 (37.5%)	0 (0.0%)
30代(16名)	4 (25.0%)	15 (93.8%)	3 (18.8%)	10 (62.5%)	0 (0.0%)
40代(12名)	8 (66.7%)	12 (100.0%)	1 (8.3%)	3 (25.0%)	0 (0.0%)
50代(10名)	4 (40.0%)	10 (100.0%)	1 (10.0%)	5 (50.0%)	0 (0.0%)
60代(10名)	5 (50.0%)	9 (90.0%)	3 (30.0%)	3 (30.0%)	0 (0.0%)
70代(10名)	6 (60.0%)	10 (100.0%)	2 (20.0%)	2 (20.0%)	0 (0.0%)
合計と平均(合計88名)	35 (39.8%)	86 (97.7%)	18 (20.4%)	37 (42.0%)	0 (0.0%)

近年社会で高まるウズベク語重視の動きに関しては様々な意見が聞かれるが、否定的な意見が全体の9割を占めた。よく聞かれた意見としては「ロシア語は世界中で使えるが、ウズベク語はウズベキスタンでしか使えない」(30代女性)、「ウズベク語の情報量はロシア語よりも少ない」(40代男性)といったものが挙げられる。ソ連期にロシア語で教育を受けた世代にとってウズベク語は自身の生活を脅かす存在でもあり、根強い警戒感が感じられる。しかし、インフォーマントのほぼ全員が今後ウズベキスタンで暮らすうえでウズベク語が必須となると回答しており、ウズベク語の広まりを否定的に捉えながらもウズベク語が今後必須になる現実を受け入れつつあるようにも見受けられる。「ロシア語は汎用性が高い言語なので、できることならロシア語で生活したいが、ウズベキスタンはウズベク人中心の国になってしまったので仕方がない」(50代女性)、「ウズベク語を話さないと生活が難しいので話さざるを得ない」(10代男性)といった意見が聞かれた。

3.4　調査結果のまとめと考察

以上の調査結果から、タタール人の多くが今もロシア語を第一言語としていること、そして一部の家庭では家庭内言語としてタタール語が継承されていることを読み取ることができた。一方で、公の場では30代以上はロシア語、20代以下の若い世代はウズベク語を話す傾向があり、若い世代を中心にウズベク語の波が着実に侵食しつつあると言える。公的機関といったウズベク語で話すことが推奨される場においては、日常的にウズベク語で話さない層もウズベク語で話すと回答していることから、非基幹民族であってもウズベク語を使用せざるを得ない状況となりつつあるのは明らかである。

調査の過程でよく聞かれた意見が「ロシア語とウズベク語を話していると民族的に自分が誰なのか分からなくなる」という意見である。こうした意見にはタタール人としてのアイデンティティを宣言したいという意識が隠れていると考えられる。ウズベク語が推進される中で、ロシア語を長い間第一言語としてきたタタール人の多くは、ウズベク語の必要性に気が付き始めている。ロシア語とウズベク語に板挟みにされることによって、しばしばタタール人としての社会的位置付けは薄れがちになり、アイデンティティ喪失の危機感を抱きはじめるに至ったものと考えられる。

このような状況下で、ウズベキスタンのタタール人によるウズベク語への反発心と、同時

的に発生したタタール語の再学習という考え方が生まれるのは自然なことである。こうした葛藤は、タタール人として、自分の民族的な位置付けを宣言したいという気持ちと、タタール人を含めた非基幹民族に不利な現在のウズベキスタンの社会的環境との間の板挟み状態から生じていると考えることができる。一方で、タタール語に対する否定的な意見も散見された。まず、長らくロシア語だけで暮らしてきた世代の根強いロシア語信仰ともいえる意識が挙げられる。ソ連期はロシア語が推進され、社会生活でも家庭内でもロシア語を話してきた一定世代以上のタタール人にとって、ウズベク語の浸透とタタール語の復活はまさに青天の霹靂とも言え、受け入れ難いものであったと考えることができる。さらに、若い世代の一部からは大学進学などに不利になるのでは、という不安の声も聞かれる。ウズベキスタンでは今も多くの高等教育の場でロシア語が重視されている一方で、近年はウズベク語能力が重視され始めている。つまり、タタール語ではなく、ウズベク語を学んだ方がよいという意見は多い。

4. 結論

4.1 調査結果から見えること

聞き取り調査と参与観察に基づいた言語使用調査の結果、タシケントのタタール人は日常生活においてロシア語・ウズベク語・タタール語の三言語を複合的に選択していることが明らかになった。それぞれの三言語は以下のように選択され、使用されている。

(1) ロシア語 長らく第一言語として不動の地位にあり、現在も多くのタタール人が第一言語として習得している。ロシア語を話すことはステイタスという根強い考えのもと、家庭内などの私的な場、教育の場や公的機関といった公的な場を問わずに選択する言語であったが、近年は公的な場で少しずつ通用しなくなってきている。現在も教育言語・家庭内言語として選択される傾向にあるが、教育言語としてはウズベク語がやや優勢になりつつある。

(2) ウズベク語 多くの世代にとっては異民族の言語という認識。以前は話さなくても生活できたが、近年は公的機関などの公的な場を中心に話す必要性が生じており、生活を営むうえで必須の言語となりつつある。ウズベク語のみを解するウズベク人も増えていることから、異民族間交流の際の共通語として選択される機会も増えつつある。また、若い世代のタタール人にとっては教育言語として選択されている。

(3) タタール語 家庭内などの私的な場で使う言語という認識のみにとどまり、学校や公的機関といった公的な場では選択されない。家庭内で使用するインフォーマントは37.5%にとどまり、多くの家庭では家族・親族間交流の際にもロシア語がより頻繁に選択されている。タタール人であることを感じさせる言語であることから、近年はタタール人としての民族意識の再認識のために一部のタタール人によって学習されている。

4.2 まとめと今後の展望

ウズベキスタンでは、ソ連崩壊そして独立をきっかけに新たな国家建設・国民統合の課題に取り組んできた。この過程で基幹民族であるウズベク人のウズベク語のみを国家語と定め、

さらに「ウズベキスタン国民」という新しい概念を普及する試みが行われてきた。こうした取り組みは、ウズベク語・ウズベク文化中心的社会への移行を後押ししており、以前のようにロシア語だけで生活することは年々困難になりつつある。タタール人のようにソ連期から長らくロシア語中心的な生活を送ってきた民族は、ウズベク語への移行に対して否定的な感情を抱きながらも、自身のこれまでの言語的習慣を変える——つまりはウズベク語を習得し、話さざるを得ない状況に直面している。

タタール人の若い世代を中心に着実にウズベク語が広がる過程で、“自身の民族語”ではないロシア語とウズベク語を話している現状を嘆く風潮もまた広がりつつある。ロシア語を話しながらもロシア人ではない、ウズベク語を話しながらもウズベク人ではない、かといってタタール語は流暢に話すこともできず、タタール人とも宣言しづらい。こうした葛藤の狭間でタタール人としてのアイデンティティ喪失の危機感を覚え、若い世代を中心にタタール語学習が流行の兆しを見せている。

独立から四半世紀が経つウズベキスタンの言語状況は現在過渡期にあり、今もなお日々変化しつつある。つまり、今回の調査対象としたタタール人の言語意識や言語使用状況もまた変化する可能性が大きいことから、今後とも引き続き調査を継続し、通時的な視点から変化の様子を見ていく必要がある。また、タシケントのタタール人の間で起きているタタール語回帰の動きが、この地域でのみ起きているのか、それとも他のタタール・ディアスポラや他の民族の間でも同様なのか、そしてそれはなぜなのか、を検討するためにも、国内外のタタール・ディアスポラや他の民族の言語使用状況にも着目し、比較する必要性も生じている。

註

1 ロシア連邦・タタールスタン共和国の領外に居住するタタール人の総称。在外タタール人とも。ロシア連邦内ではバシコルトスタン共和国やマリ・エル共和国といった周辺地域のみならず、シベリアや極東地域など広い地域に居住している。連邦外ではウズベキスタンやカザフスタンといった中央アジア諸国のほか、中華人民共和国新疆ウイグル自治区、トルコ、フィンランド、オーストラリア、アメリカなど、その居住地域は広範囲にわたる。なお、本稿では先行研究に則り、クリミア・タタール人は別の民族とする。

2 ウズベキスタンでは2000年に行われた国勢調査以来、一部の民族を除いて民族別の人口などは公表していない。在ウズベキスタン共和国タタールスタン共和国代表部によれば、2013年当時のウズベキスタンのタタール人の人口は21万人程度、全人口に対して1.0%未満と予想されていた。そのうち半分程度はタシケント市とその近郊に居住しているという。

3 明確な定義は定まっていないが、狭義では個人が自分の所属するネーションに対して抱く帰属意識として捉えられる(中谷2000)。広義では、ネーションに対して自己を一体化させることを通じて形成される意識・信念・感情と定義され、つまり帰属意識に関わる諸意識も含まれる(田辺2001)。広義では他国意識までもが含まれてしまうため、本稿では「ネーション(＝自国)に対する帰属意識」のみをナショナル・アイデンティティとして定義する。

4 自民族の名を共和国の名に冠することのできる民族集団(нация)を「基幹民族」、それ以外の少数民族のことを「非基幹民族」と呼ぶ。基幹民族は自らの国土や国家語を持ち、名義上の国民国家を形成している。国家の名称を冠する民族ゆえに名称民族ともいう。多くの場合は基幹民族がマジョリティ、非基幹民族がマイノリティの関係にある。基幹民族語は基幹民族の民族語、

非基幹民族語は非基幹民族の民族語を指す。

5 独立とともにウズベク語・ウズベク文化を中心とした「ウズベキスタン国民」という概念が推進されたことにより、息苦しさを覚えた非基幹民族（＝非ウズベク人）の多くが国外に流出した。具体的な人数は公表されていないが、その数は数百万人とも言われている。このことは「帰還（*"возвращение" на свою историческую родину*）」とも呼ばれ、例えばウズベキスタンのカザフ人がカザフスタンへ、ロシア人がロシアへといった"自身の歴史的な故郷"に移住することを指す。

6 ウズベキスタンの義務教育学校は学校によって教育言語が異なり、いくつかの民族は自身の民族語で教育を受けることができる。本稿ではウズベク語以外の言語で教育を行う学校を民族語学校と定義する。なお、ウズベキスタン共和国中高等教育省によれば、2016年6月時点でウズベキスタン国内では7言語で初等・中等教育を受けることができ、9,779校の一般的な中高等義務教育学校のうち8,982校がウズベク語、246校がカラカルパク語、207校がカザフ語、172校がタジク語、110校がロシア語、34校がトルクメン語、28校がクルグズ語での授業を行っている。なお、大学以上の高等教育機関における教育言語はウズベク語かロシア語の二択のみとなっている。なお、ウズベキスタンのタタール人の多くは初等教育の段階からロシア語学校あるいはウズベク語学校で教育を受ける。

7 聞き取り調査や参与観察といった手法を用いた個別事例の調査に関しては、ウクライナ・ハリコフの人々の言語意識調査を対象としたM.Sovik(2007)や、クルグズ・ビシケクのクルグズ人の言語使用と言語意識に焦点をあてた小田桐(2015)の研究が挙げられる。

8 中央アジア諸国では身分証（パスポート）に民族籍の欄があり、ここに自身の民族が記される。しかし、例えばウズベキスタンではウズベク人とタジク人、タタール人と朝鮮人といった異民族間での婚姻も多く、子供は18歳（成人）になると同時に自分自身の民族籍を選択することができる。近年では進学や就職で有利になるという理由から、基幹民族として民族籍を登録する非基幹民族も少なくはない。

9 *О языках в Узбекской ССР*

10 *О государственном языке Республики Узбекистан / O'zbekiston Respublikasining "davlat tili to'g'risida"gi qonun*

11 *Конституция Республики Узбекистан / O'zbekiston Respublikasining Konstitutsiyasi*

12 *О государственном языке Республики Узбекистан / O'zbekiston Respublikasining "davlat tili haqida"gi qonun*

13 Fergana news: http://www.fergananews.com/articles/5930 *"Узбекистан: Русский язык уходит. И узбекский не остается..."* (2016年8月10日閲覧、ロシア語)

14 ウズベキスタンでは、教育言語によってコースが分けられており、それぞれロシア語コースとウズベク語コースの二つが存在する。

15 ウズベキスタンは2000年に行われた国勢調査の結果が発表されて以降、民族別の人口などは公表されていない。この当時のウズベク人 の割合は70%程度であったが、非基幹民族に比べてウズベク人の自然増加率が高いことや、独立後10年間の混乱の中で多くの非基幹民族が国外に移住したことで、ウズベク人の人口は高まり、80%以上に達していると推定される。

16 報告者は筑波大学の学術協定枠を利用し、タシケントの世界経済外交大学(Jahon Iqtisodiyotiva Diplomatiya Universiteti)に2013年3月12日から2014年3月3日にかけて交換留学の機会を得た。

17 調査はタタール語・ロシア語・ウズベク語の3言語を用いて行った。

参考文献

淺村卓生「1924-1934年における「ウズベク語」理念の模索：標準語の母音調和法則の扱いをめぐって」『東欧研究』No.36、2007年、48-60頁。
臼山利信「旧ソ連地域における社会環境の変化とロシア語事情：ウズベキスタン共和国、キルギス共和国を中心として」『SLAVIANA』No.20、2005年、194-222頁。
臼山利信「民族国家語とロシア語：グローカル化する中央アジアの言語状況」堤正典(編)『ロシア語学と 言語教育IV』神奈川大学ユーラシア研究センター、2014年、23-31頁。
宇山智彦「言語がもたらす中央アジア社会の統合と分裂」『アジ研ワールド・トレンド』No.19、1997年、20-21頁。
エルタザロフ・ジュリボイ『ソヴィエト後の中央アジア — 文化、歴史、言語の諸問題』大阪大学出版会、2010年。
小野原信善「アイデンティティ試論 —— フィリピン言語意識調査から」『ことばとアイデンティティ —— ことばの選択と使用を通してみる現代人の自分探し』小野原信善・大原始子編著、三元社、2004年、15-51頁。
小田桐奈美『ポスト・ソヴィエト時代の「国家語」国家建設機のキルギス共和国における言語と社会』関西大学出版部、2015年。
帯谷知可「最近のウズベキスタンにおける国史編纂をめぐって —— 『民族独立理念』のもとでの『ウズベク民族の国家史』」『東欧・中央ユーラシアの近代とネイションII』、2003年、35-48頁。
カルヴェ・ルイ＝ジャン『言語政策とは何か』西山教行訳、白水社、2010年。
塩川伸明「ソ連言語政策史再考」『スラヴ研究』No.46、1999年、155-190頁。
塩川伸明『民族と言語』岩波書店、2004年。
ダダバエフ・ティムール『社会主義後のウズベキスタン — 変わる国と揺れる人々の心』アジア経済研究所、2008年。
田辺俊介「日本のナショナル・アイデンティティの概念構造 – 1995 ISSP National Identity データの実証的検討から」『社会学評論』No.52-3、2001年、398-412頁。
トフタミルザエヴァ・マシフラホン、蒲生慶一「独立後のウズベキスタンにおける教育改革と就学率の変 化：教育改革の今後と課題」『Quadrante: Areas, cultures and positions = 四分儀：地域・文化・一のための総合雑誌：クァドランテ』No.16、2014年、153-175頁。
中谷猛「『ナショナル・アイデンティティ』の概念に関する問題整理」『立命館法學』No. 3-4、2000年、1301-1332頁。
ナハイロ・ボフダン、スヴォボダ・ヴィクトル『ソ連邦民族・言語問題の全史』高尾千津子・土屋礼子訳、明石書店、1992年。
西山克典「タタール人」『中央ユーラシアを知る事典』宇山智彦ほか編、平凡社、2005年、322頁。
BAKHRONOVA Munisa「民族的マイノリティの言語選択とアイデンティティ：旧ソ連中央アジア・ウズベキ スタンの学校教育現場の事例から」『言語情報科学』No.6、2008年、265-282頁。

英語文献

BERNARD, Comrie, *The languages of the Soviet Union*. 1981, Cambridge University Press.
BOHR, Annette, "Language policy and Ethnic Problems of Uzbekistan and Its Neighbors," GRAHAM, Smith at al.(Eds.), *Nation-building in the Post-Soviet Borderlands: The Politics of National Identities*. Cambridge University Press, 1995, pp.197-223.
DAVENEL, Yves-Marie, "Are National Minorities of the Former USSR Becoming New Diasporas? The Case of the Tatars of Kazakhstan," FERNANDEZ, Jane (Eds.), *Diasporas: Critical and Interdisciplinary*

Perspectives. Oxford: Inner-Disciplinary Press, 2009, pp.75-85.

FIERMAN, William, *Language Planning and National Development: The Uzbek Experience*. 1991, Mouton de Gruyter.

FUMAGALLI, Matteo, "Ethnicity, state formation and foreign policy: Uzbekistan and Uzbeks Abroad," *Central Asian Survey*. 2007, No.26.

GAZIZOVA, E. & FAYZULAEVA, M.P., "Tatar diaspora in Latvia," *Bulletin of Kazan State university of culture and arts*. No,2, 2010, pp.101-104.

KLAAS, Maarja, "The Role of Language in (Re)creating Tatar Diaspora Identity: The Case of the Estonian Tatars," *Journal of Ethnology and Folkloristics* (9). No.1, 2005, pp. 3-19.

NABIULLINA, G.A. & YUSUPOVA, A.Sh., "On the Linguistic Situation of the Tatar Diaspora in the USA," *Mediterranean Journal of Social Sciences*. MCSER Publishing, Vol.6, No.5-3, 2015, pp.298-302.

NAKAMURA, Mizuki,"Language Situation and Attitude towards the Tatar Language: The Case of Tatars in Tashkent, Uzbekistan", *Культурные, экономические, технологические контакты и взаимодействие Японии и Татарского мира: история и современность (Материалы международной научной конференции, посвященной 80-летии мечети в г. Кобе)*. Институт истории им. Ш.Марджании Академии наук РТ. 2015, pp.53-60.

PAVLENKO, Aneta, "Russian in Post-Soviet Countries", *Russian Linguistics*. No.32-1, 2008, pp.59-80.

ROTHERAM, M.J., PHINNEY, J.S., "Introduction: Definitions and perspectives in the study of children's ethnic socialization," Phinney, J.S. & Rotheram, M.J. (Eds.), *Children's ethnic socialization: Pluralism and development*. Newbury Park, 1987, pp.10-28.

SOVIK, Margrethe, *Support, Resistance & Pragmatism: An Examination of Motivation in Language Policy in Kharkiv, Ukraine*. Stockholm, Stockholm University, 2007.

TITOVA, T.A., KOZLOV, V.E., FROLOVA, E.V.,"Ethnic Cultural and Religious Practices of Migrant Women in the Republic of Tatarstan," *Journal of Sustainable Development* (8). No.4, Canadian Center of Science and Education, 2015.

ロシア語文献

Арутюнян, Ю.В. Русские в ближнем зарубежье (по материалам справнительного этносоциологического исследования в Эстонии и Узбекистане) // СоцИс (3). 2013.

Байрамова, Л.К. Татарстан: языковая симметрия и асимметрия. Казанский университет. Казань, 2001.

Белоусов, В.Н., Григорян, Э.А. Русский язык в межнациональном общении в Российской Федерации и странах СНГ. Российская Академия Наук Институт русского языка имени В.В.Виноградова. Москва, 1996.

Губогло, М.Н. и Смирнова, С.К. Республика Татарстан: русский язык в трансформационных процессах // Русский язык в формировании межэтнической солидарности (региональные аспекты языковой ситуации в России и ближнем зарубежье). Российский университет дружбы народов. 2002.

Ильхамов, А.А. Этнический атлас Узбекистана. Институт Открытое Общество — Фонд содействия — Узбекистан, 2002.

Исхаков Д.М. Татары: популярная этнография (этническая история татарского народа). Татар. кн. изд-во. Казань, 2015, С. 78.

Садыкова, Л.Р. Исламский фактор в сохранении этничности в эмиграции (на примере тюрко-татарской диаспоры в США // Вестник Томского государственного университета. No.339, 2010, pp.82-84.

Шарыпова, Н.Х. Двуязычие в Татарстане. Казанский Университет. Казань, 2004.

Юсупова А.Ш. Татарская диаспора в Китае: язык и культура. Жизнь, посвященная тюркологии, 2011, pp.377-38.

新聞記事・インターネット記事・サイト

Безнең гәҗит.ру (2013) «Рөхсәтсез мигрантларны аулауда Татарстан – икенче»
<http://beznen.ru/basma/2013-32/rohsetsez-migrantlarni-aulauda-tatarstan-ikenche/ > (タタール語)
(2016 年 11 月 24 日閲覧)

ЗӘБИРОВ, Г.А. (1996) "Ни өчен без телебезне саклап калырга тиеш." Мирас, No.5, pp.67-68.
(タタール語) (2016 年 11 月 24 日閲覧)

Fergana news: "Узбекистан: Русский язык уходит. И узбекский не остается..."
< http://www.fergana-news.com/articles/5930 > (ロシア語) (2016 年 11 月 24 日閲覧)